

名作再読、拾い読み(9)

『影と光』 ("The Shadow and the Flash")

小澤 文彦

ジャック・ロンドン(Jack London, 1876-1916)は、サン・フランシスコ生まれのアメリカ自然主義文学を代表する作家です。

貧しい少年時代を送り、小学校を終えると直ぐに働き始めます。様々な仕事を経験した後、1893年にアザラシ狩りの船に乗って日本に向かいます。7ヵ月後に帰国した時、アメリカは大恐慌に見舞われていました。失業者の群れに混じって放浪の旅に出掛けます。放浪の間に旺盛な知識欲を示してダーウィンやハーバート・スペンサーの進化論、ニーチェの超人思想、マルクスの社会主義など幅広く読書します。1895年にオークランドに戻ってハイスクールに入り翌年にはカリフォルニア大学に進学しますが、家計を助けるため中途退学せざるを得ませんでした。1897年、ジャックが21歳の時、アラスカのクロンダイク地方で金鉱が発見されたというニュースが伝わると、彼もゴールド・ラッシュの波に乗って冒険に乗り出します。その時の体験から生まれた短編が雑誌に採用され始め、1900年に最初の短編集『狼の息子』を出版した後、『野性の呼び声』(1903)で人気作家となりました。以後、創作活動を活発に行い、豪華な帆船を建造したり大邸宅を建てたりして裕福に暮らしますが、1916年に40歳という若さで亡くなりました。モルヒネ自殺とされています。

傑作とされている『野性の呼び声』では、カリフォルニアの邸宅で安楽な生活を送っていたバックという犬が、攫さらわれてアラスカへ売り飛ばされ、橇そり犬として働かされているうちに野性に目覚めていき、やがて狼のリーダーとなる姿が描かれています。反対に、狼の子が人間に飼われて文明化された犬になる『白い牙』(1906)という作品もあります。

他に、イギリスの首都ロンドンの貧民街をルポルタージュした『どん底の人々』(1903)、自伝的小説『マーティン・イーデン』(1909)と『ジョン・

バーリコーン』(1913)、社会小説『鉄の踵』(1908)などがあります。

短編集は彼の想像力の豊かさを示す作品が多いと言われていますが、その中から『影と光』(1903)をお薦めしたいと思います。

黒眼黒髪のロイドと金髪碧眼のポールという、二人とも色が違うという点を除けば体型から性質まで瓜二つと言える少年たちがいました。この二人は何事においても互いに対抗意識を燃やすのですが、大学へ進学して二人とも化学を専攻します。同じ女性に恋をして二人とも断られてから、敵対心は益々激しくなるばかりでした。ロイドはそれを塗れば見えなくなる究極の黒い塗料を研究し始めます。成功しますが影を消すことはできません。他方、ポールは生物に作用して化学変化を起こさせ透明にする試薬を作り出します。しかし、透明になる代わりに虹色の閃光を発するようになる問題は未解決でした。

透明になったポールを、溶液を塗って姿が見えなくなったロイドが襲います。死を賭しての闘いでした。他の人には影と虹色の閃光の動きしか見えず、殴り合いの音や呻き声が聞こえるだけでした。遂に、光は消え影も動かなくなります。

姿形を見えなくするという人間の昔からの夢を、光の全吸収と、光の全反射という対照的な方法で具体化する面白さと、協力し合えば発展が期待できそうなものを、無意味に争うことから折角の才能が共倒れになるという愚かしさをメランコリックな雰囲気でも語りかけてくる短編です。

参考文献

1. "The Bodley Head Jack London"
(Bodley Head, 1964)
2. 『死の同心円』 井上謙治訳 (国書刊行会, 1988)

おざわ ふみひこ (係・情報サービス課)